

「み仏様がお見通し」

——光真寺のおばあちゃん——

大田原市 菊地展江

お好きだった梅の花の綻びを待たずに逝ってしまったわれたお寺のおばあちゃん。人々の悲しみをすべて洗い浄めるような大雪の中のお通夜のこと、やさしくてちよっぴり哀し気に見えた微笑みの遺影も、つい最近のことのようにまざまざと思い出されますのに、私たちの大切なあなたがお方が亡くなられて早くも五年有余の月日が流れ去っているのです。

自宅から幼稚園への道すがら、お会いすると必ず腰をかがめて両手を合わされ、「ご苦労様。よろしくお願ひしますね」とにこやかに語りか

けて下さったあのお姿。私にとって、それは亡き老方丈様のお気持ち、お姿と全く一心同体のものと思われるのです。私などの想像もつかぬ偉大なお仕事をされ、多くの人々の尊敬の的であり、生きるよすがとも慕われた尊いお方でありながら、決して奢りたかぶることなく、身辺のさまざまな人を区別せず親身になって下さった老方丈様の広さ、大きさ、温かさはそのままあの小柄な大奥様の中に同化され、御夫妻が全く同じ呼吸で同じ価値感で私共を見守って下さったように思います。

お若い頃に最愛の御長男が幼逝されるという大きなお悲しみの中でお地藏様へのご信仰も尚一層深められたと伺いました。

昭和五十四年二月に老僧に先立たれてからは御隠居で、大きな遺影とお位牌を前に御供養にあけていらした真摯なお姿を忘れることが出来ません。ご自分の悲しみや辛さを私共には一切お見せにならない大奥様でした。

相次いで三番目のお子様、本清さんが病気で亡くられるという大きなご不幸に見舞われた大奥様でしたが、その時も、私共に泣いたり嘆いたりのお姿をお見せにならず耐えていらつしやいました。何事も大きな流れの中の定めごとと、悲しみはご自分の胸深くにしまわれた、奥深い静かな笑顔のみが思い出されます。

「最近の私はいつも方丈様と本清のそばにあつて守られているから淋しいとも辛いとも思わないの。本清の『のだ仏』を大切におまつりし

て拝んでいるといろいろなおしゃべりが出来て気持ちも落ち着くのよ。いつもどこかで私の気持ちをわかっていて下さる。何事もみ仏様のおはからい。と思うと心がしゃんとして明るくなるのよ。」

とおっしゃった時の大奥様のまなざしを心から美しい、と思ったものでした。

ふとした御縁から私は会津西方に西隆寺というお寺を訪ねたことがあり、一時期方丈様（遠藤大禅老師）とその奥様のお世話になったことがありました。素朴なありのままの野原の一隅のような寺院に、三十三人の美しい観音様と御老師が思いを込めて書かれたという詩がさり気なく点在している西隆寺の境内。最初に伺った時にはコスモスや萩の花が観音様の足元にゆれていて、故もなくしみじみと涙が溢れて来たのを覚えています。ビルマの戦線できびしい生死のきりぎしに立った時、しみじみと心に浮んだ



母のおもかげ、ふるさとの山川。それはそのまま観音様のみ心と悟られたという御老師のお話や風貌もさることながら、そのお側でお世話をなさる奥様のお人柄に私は強い感動を覚えたのです。本堂も庫裡も鍵をかけたことがない。いつ、どなたが立ち寄られても自由に心と体を休めていただけるとは、とのお話。ゆきずりの私共にまで気軽に「お振舞い下さったそうめん」の味を忘れることは出来ません。又お話の間中、入れかわり立ち寄る村の人々が口々に「おくさん先生」「ばあちゃん先生」と呼びかけては野菜やら煮物やらを親しみをこめて置いていかれるのでした。私はこの時、うちの光真寺の大奥様のような方が、この会津の山奥のお寺にもいらっしやったことに深く感動したものでした。

その時方丈様からいただいた写真集『観世音声を限りに』はいつまでも私の宝物です。

本清さんを亡くされて御隠居にこもりがちの大奥様をおなぐさめしたくて、私は西隆寺さんからとり寄せた同じ御本をさしあげたことがありました。次の朝「久しぶりにたくさんたくさん涙を流しました。ありがたくて拝むばかり。すばらしい仏様との出会いを本当にありがとう」と本を抱いて何度もおっしゃって下さいました。どんな時にも園長先生の身を案じ、幼稚園を気遣い、私共の仕事の無事を祈って下さるこの方は、私たちにとって尊い観音様なのかもしれせん。

この写真集の中の「子恩観音」の詩を読む時、私には大奥様の他人へのやさしさ、ご自分への限らない厳しさがこの子恩観音とオーバーラップしてまいります。

私に与えられた子供たち
私に与えられた子供たち

片身のせまい思いをさせまいと
無気力でしょぼくれ姿

正体もないへべれけの姿

いやしげな姿も見せたくなないと

苦勞も貧しさも超えて

清く正しくふるい立つ力を

与えてくれたのは子供たち

しみじみと子の恩を思う

今まで生きて来た悦び

有難うと合掌して拝む

私が私になる為に

観音様が私の子供になつて

私のまえに現れて下さつたと

本当に私は信じています

—遠藤大禅—

お寺の大奥様。多忙を極める御住職をかげで
支えながら、たくさんのお子様を立派に育てら

れ、悲しい時も辛い時も明るく小まめにお子様
方の成長を援助されたことでしょう。

「あんなに小柄なおばあちゃんから、この屈
強な青年たちが!!」という地元の方々の讃嘆の
声を何度も耳にしておりました。お寺のこと、
お子様養育のこと、檀家の皆さんのこと、ご近
所の、お知り合いの、幼稚園のこと等々本当に
さまざまな方々に慕われ頼りにされた光真寺の
大奥様。でも私はたった一度だけ、おばあちゃ
んのお嘆きを聞いたことがあるのです。あの時
代の最高教育を受けられて日本画や刺しゅうに
相当な趣味をお持ちだったとか。

「忙しさに振りまわされる日常の中でいつか
ゆっくりと自分のやりたいことを、と夢見てい
たけど、なかなかのんびりする時期はなくて。
やつとその時が来たら目もだめ、体も言うこと
を聞かないの。情けないのよ」

と曇られたお顔もほんの一瞬で忽ちいつものお

ばあちゃんの笑顔に戻られました。でもこの事は私の胸に鋭く響いた忘れられないひとこまなのです。本当にまだまだお元気で少しはのんびりのご自分のことを楽しんでいただきたかったです。軒下の小鳥と語らい、大好きなお花を育てて日本画の腕を見せていただきたかったと思います。

お釈迦様はこのお方にたくさんの尊い使命を託されてこの下野の地に、光真寺に菩薩様としてつかわされたのでしょうか。長い人生を歩まれる中で哀しい誤解や争い事をごらんになったり、いつの時代でもそうであるように世代の違いに戸惑われた時、必ず合掌して「なにもかもみ仏様のなすがまま。良いも悪いもみ仏様がお見通し」と呟やかれたあの言葉、あの風情は私をつたない人生の大切な指針となりました。今、六十の坂をはるかに越えて幼子とのぬくもり、尽きせぬ感動に満ちた職場もそろそろ引退の時



期を迎えて切に思うことは、人を咎めず、人を恨まず、と、大奥様が私に語りかけて下さったこの言葉、この思いなのです。

入院されて最後に病院をお訪ねした時、私の手を両手でしっかりとにぎり、「ありがとうね。皆さんのおかげで私は今極楽浄土にいます。おぜいの方々にお会い出来てそれが何より嬉しいの。お忙しい貴女にまで来ていただけで本当に夢みたい。ありがとうね」とくり返し言われたおばあちゃん。あとから来られた敦子さんに「あっちゃん、子供達は大丈夫なの？」と最愛のお孫さんへのやさしい心遣いを見せていただきました。このまま、いつまでもお元気で、と祈りましたのに、最後は息子さんである現方丈様御夫妻を幼子のように「お父さん」「おかあさん」と頼りにされて、美代子夫人には「光真寺へ帰りたい。光真寺へ連れて行って」と訴えられたとか。

亡くなられてはや六年近い月日が流れ去り、この現し世の人々もお寺も、そして仕組も大きなうねりに身をまかせて変容しています。今頃は御浄土の蓮の台に身を置かれて大奥様は何を思い、下界の様子をどうごらんになつていられるのでしょうか。幸せなあの世とやらがあつてのんびりと美しい華やかな絵でも描いていられたらいいな、などと幼稚な夢を見てしまいます。この度大奥様の思い出を、との御依頼をいただき、心の中に大切にしまつてある大好きな方のおもかげをしみじみと思い浮かべ、なつかしいふれあいのひとこまを顧みる貴重な時間をいただきました。つたない、本当に自己満足にすぎないひとりよがりの追憶文になつてしまいました。が、み仏様になられた大奥様には、私のひたすら敬慕してやまぬ気持をお見通しいただけるかな、などと考えながらペンを置きたいと存じます。

合掌